

「対人援助学」の立場から

望月 昭（オープン・リサーチ・センター整備事業
「臨床人間科学の構築」自己決定とQOLプロジェクト代表）

『対人援助学』とファーストステップ・ジョブグループ

FSJG 特別例会 090222

今、必要な支援 対人援助学の立場から

望月昭（立命館大学）

ブログ：「対人援助学のすすめ」

図1 タイトル

私からは、今の上田さんの話で大事なところはどこだったのか、ということについて、『対人援助学（望月，2007，望月ら，2009）』の立場からというスタンスでお話したいと思います。

今回のセッションのタイトル（図1）、「今、必要な支援」ですが、必要な支援は常に（過

去の出来事の追求でも、将来に向けての準備でもなく）『今、できること』をすることである、ということです。『いつでも最初の一步』という言葉を、2年前の今回同様のFSJGの公開セッションにおける全体テーマとして使いましたが、このグループの名称でもあるその姿勢に対応した支援のスタンスとも言えます。

「対人援助学」ですが、このFSJGとの関係は、『対人援助学のすすめ』という私のブログで、「FSJS」、あるいは「ファーストステップ・ジョブグループ」を検索していただきますとその内容についての過去の資料などのリンクを張っておりますので、ごらんになることもできます（<http://d.hatena.ne.jp/marumo55/>）。また、わたくしの展開する「対人援助学」の基本となっている応用行動分析という学問領域がありますが、これもブログ内の検索で辿っていただければ、全ての授業資料が公開されていますので、興味のあ

る方はそこから見てください。

対人援助とは何か。いま、この名称を冠する新しい学問領域を創ろうとしています。今年の11月、第1回の「対人援助学会」を開く予定です。そこでの発想は、まさに上田さんが発表されていた、ある種の困り感、広義の「障害」を持っている人への対応のあり方を実践的に考えるための学範（discipline）です。

今までの学問領域は、とにかく相手を知りたがる、わかりたがる、教えたがる、治したがる。

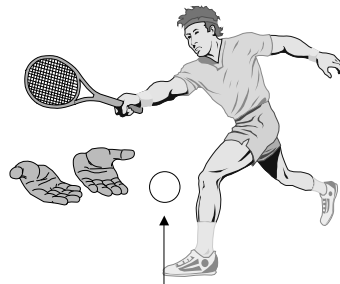
しかし今日の上田さんのFSJGの発表にもあったように、「ひきこもり」への対応は、その人を知るためにやっているのではない。その人をよく知って、生後どういことがあったからこうだとかいうやり方ではないですね。

今、出会って、そこから何がしたいのか、そのために何ができるのか、相手を知ったから何かができるの

ではなく、当事者が何かをやろうということの支援を通じて、そこから逆に相手を知るとい、そういう立場です。「心理学者」は相手のことを「いやいや、あなた自身より、私の方が知っているぞ」という顔をしたがる。でもそんなものは、はた迷惑です。失礼しちゃうったら、ありやしないという。さんざんいろんなテストをして「あなた、モテないでしょう」と言うわけ。そうじゃなくて女の子を紹介してくれるのが重要なので、本来、「臨床」と

対人援助とは？

知る（測る）・教える・治すではない。



助ける：Service

図2 サービスとは、御主人（当事者）が、好きな方向へ打つために最適なボールをあげること。

はそういうものであるわけです。口でばかり言わずに相手を紹介しろという話です。

援助というのは基本的にはそういうもの（相手を知る）ではなく「こんなのはどうでしょうか？」という具体的提案ができないといけない。今までの学問領域である、知るとか、教える、治すということでは全然ない。図2で示したもの、これは対人援助＝サービスのありかたを表したものです。なぜサービスゲームかという、（現在のテニスゲームでは）本人が相手を負かすために、おっかない球を打つのがサービスと言うんだけど、そうではなく、ご主人様の打ちやすいところにボールを投げるのがサービスなんです。ご主人様が好きなところに打てるように、ご主人様を尊重するのがサービスなんです。『助ける』というのはそういう意味だと。ご主人様に「あそこには打たないでだめだ」と教えるわけではない、ご主人様に打ちやすいところに、うまいところに過不足なく、いい球を出す。

考えてみると、こういうことを考える学問領域はなかったんです。知るとか、教える、治すばかりだった。あと『助ける』については確かに社会福祉があります、あれはまた基本的にマクロな話です。経済状況、社会制度とか。そして、一人ひとりに対応するという話になると、急に『教える』とか、『治す』になっちゃう（望月、1989参照）。一人ひとりを助ける。黒衣（くろこ）になるのが一番いい。そういうやり方をするのはよく考えてみるとなかなか難しいですね。過不足なく行うにはどうしたらいいか。ご主人様が好きな方向にボールを投げる。

その時、一番大切なこと、目標の原則は何かという時、まず与えるという形で、相手が何もしないのに与えちゃうというやり方ではない（図3）。何もなくてもご飯の時間だからご飯をあげる。そうではなく何らかの意思表示があった時に何か環境から返ってくる。そういう事態を成立させるように支援することが大事だということです。つまりGivenではなくGet。行動分析学をつくったSkinnerが言っていますが、人を助ける時の大事な倫理は何か。一方的に施す、与えるのではなく、本人が自分でやったという気持ちにできるように支援することが大切だというわけです。誰かに一方的にしても

らって、「ありがとうございます」と当事者に言わせるような援助ではないんですね。自分が「よくできたぞ」と思えるように、「ゲットした」という形で考えられるような支援をしないとイケない。これを「自発的に行動できる」という風に表現します（図3）。

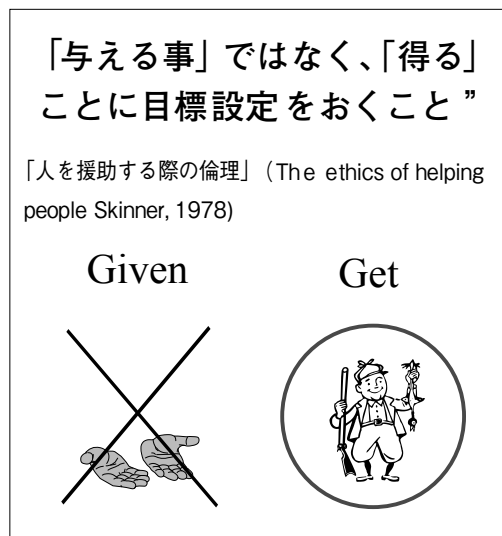


図3 自発的に「行動できる」ことが基本

援助・援護・教授

対人援助の「やったぜ」（＝行動の成立）ということを成立させるには、どういうやり方の中身があるか。「対人援助学」の中に、僕の発想では3つの機能がある（望月、2007参照）。

「援助」：順番が重要なのですが、まず第一に「今、できる」ように環境設定を変える。今、できるようにする。今、できるようにするにはどうしたらいいか。「頑張ってやったら何かいいことあるよ」じゃないんです。「今、できることを見つける。今を認める」ということですね。もちろん人によっていろいろあります。しかし大切なことは、常に「援助設定」を最初に持つてくるということです。「本人が努力して足りなかったら援助設定を整える」

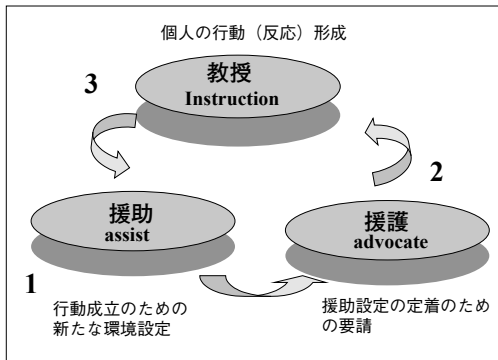


図4 対人援助作業の3つの機能

話にあったように、手紙を渡すとか、それが毎月来る、しかも同じものがくる、というのがひとつの大切な援助設定です。普通の人だったら1回手紙を出して、とっておいてもらえば後で気になった時に出すだろう。でも、いわゆる「ひきこもり」状態になっている人への援助設定はそれではだめなんで、それでは見なくなる。繰り返し、繰り返し選択の機会がある。しかも、少なくとも最初は、自分でドタキャンしてもいい。そういう緩めの基準を、まずは持ってくるのが大切です。「援助」というのは、行動の成立（GET）に向けて、選択肢を明示する、ということと、いったんその行動の完成基準を緩めるというのが主な内容なんですね。いわゆる普通の仕事だったら（ドタキャンなどのように）「それだけはやめてくれ」というようなことですが、最初はとにかく敷居の低いところからやる。学校教育なんかでは「そんなの、甘い」「そんなに世間は甘くない」といわれるかも知れない。でもそうじゃないんですね。今、できることをやって自信をつけていくことの方が、遠回りのようで実は一番早いんです。これは行動分析学でも、これまでの研究成果や事実で繰り返し確認されていることなんですね。「試行錯誤学習」ではないんです。やった時、褒めて、やらなかったら何もしないで、そのうち本人が伸びるだろう、そういうものではないんです。

今、できるように基準を緩めて、とにかくできるようにする。甘いと思われるかも知れないけど、皆さんも、これまでの「良い教育」というのはそう

のではないんです。「今、できるように」ともかく援助設定を持ってくる。これを過不足なくやらないといけない。できるのに手伝ってはだめだし、ぎりぎりのところで「これがあればできるんじゃないか」というものを用意する。FSJGの活動でいえば、上田さんの

いう形で受けているんですよ。自信がなくならないように、うまくステップを細かくしてくれるとか、上手な子育ての人は、決して叱るところに生き甲斐を感じりはしないですよ。いいところを見つけていこうとする。そうやれば絶対に前に進む。あたりまえのことではあるんですが、あえて言葉に直してみると「教えこむことではなく、治療することではなく、まず今、その当事者がやりやすい形はなんだろう」という状況設定をすることが大切なわけです。

援護：その上で、それまでにない選択肢や基準の緩和をするするわけですから、世間でそのやり方が認められているとは限らない。ここでの「ジョブ」という行動については、ある特定の人だけが認めるだけではすまない場合も多いですから、「これで認めてください」と、きちんと社会に向けて主張し要請しないといけない。これが「援護」という作業です。FSJGでは、グループの中であれば皆が認めているわけですね。必ずしもすべての世界がそれを認めているとは限りませんから、親御さん一人でやると、うっかりすると「甘やかし」になってしまう。そうではなく、それをグループで認めるわけですから、当自者も「うちの親だから俺に甘くしている」と妙に遠慮したりする必要はない。グループ全体が支えてくれる。ある種、第三者に認められている状況ができるわけです。

教授：そうした援助、援護の作業を前提とした上でもさらに教えることはあるだろう。今までだったら、とにかく何かできたら社会と関係が持てる、という順序ですが、これはそうではないわけです。「リハビリテーション」ということもよく考えてみると実は「援助」が先にあることが多い。環境設定を少し動かして、今、できることからやって、「今はこれでいくから、（他の人にも）なにぶんよろしく」と言って、条件設定（援助設定）を整えてその上で、教える（教授）という形になる。

「ひきこもり」の例で言えば、仕事を配置したとしても、長い間、家から出たことがない。ですから、そもそも地下鉄の切符の買い方がわからないということもあるわけです。それは、やはり教えなくてははいけない。つまり「選択の機会」をつくっても、それだけではだめで、やはりどうやるかを教えな

いといけない。FSJGの事例を聞くと、出かけるというところまで行った人の場合は、一人で行くらしい。そこは自力で行く力ができている。あまり教授しなくても援助設定だけでできる。そのへんは、知的障害のあるお子さんと違うところですね。ポテンシャルはあって、何らかの理由で出られなくなっている。実際、外に出てみて違和感がある。しかし、多くの場合、では、地下鉄の切符をどうやって買うかというのは「知識」としてはあるから、そこから自分で買うことを「教える」(＝教授)作業は比較的簡単だということです。これが重度のお子さんだと「教授」は結構しないといけない。でも、そうした場合でも、援助と援護は優先させないといけないことには、もちろん変わりません。

対人援助は表現してナンボ

今日、聞いていて、なるほど納得だと思ったんですけど、「助ける」とい

「助ける」は表現してナンボである

- 1) 誰かが何か「できる」ようになるには、多くは社会への要請(援護＝言語行動)が必要条件である。
- 2) 援助・援護・教授という3つの仕事は、単独では行い切れない(連携が不可欠)であれば、共通言語を持つ必要がある。
- 3) 「助ける」は、本来、人が自然に行う行為ではないかも知れない。であれば絶えずチェックしていないとアカン。
- 4) 本当に、当事者が望んでいることなのか？それをどのように確認するか方法(＝表現として)を示す必要がある。

うこと自体は、黙々とどこか知らないところで行われている場合もある。ふつう一般の親子のあいだの子育てなんかは表現なんかいちいちしない。

「ひきこもり」という状況は、最初にあるのは家庭という状況です。自分に家の状況を表現する、といったことにはそもそも抵抗があるのも当

然です。その延長で、そもそもひきこもりのグループというのはできにくい。

しかし、ジョブの成立というものを考えたとき、家内仕事だけでやることは、とても無理です。グループをとることによって、他の人から認められる

図5 対人援助は表現してナンボ

ということもあり、仲間がいるということは支えられるということなんだけど、そのことで大事なのは上田さんの話しぶりを聞いていると、表現すること、仲間の前で表現できるということなんですね。この表現できるということと、グチを聞いてくれる人がいるのは大切だ、というのとは違います。FSJGでも、前はグチばかりだった、最初の頃は。それが今や、グループとして仲間が支えるということは、まず「何か前向きの表現をしたことを聞いてくれる」人がいる、そしてその内容をつなぐことができる、という確かな感触なんだと思います。そういう意味で表現することは大事であるわけです。

「対人援助学」と「対人援助」は違うんです。表現することなんです。学問として第三者が、上から目線という学問ではなく、表現することそのものが、とても実践に大事だと。よく学校の先生なんかでも「黙々と実践する」といったことが良いことのように言われる場合がありますけど、今は、それでは実践の半分だと。その子が「できる」ことを他人に伝えられて初めて実践と言える。

援助、援護、教授という対人援助の連環について、あれはぐるぐる回っていくところが対人援助の進歩になっていきます。教える（＝教授）だけだったら黙々と隅っこでやったらいい。しかし、優先事項である「援助」は、新しい環境設定をつくって周囲に「お願いします」という、このお願いします（＝援護）の部分は、あくまで言葉（言語行動）でやるわけですよね、援助者は。口をつぐんだまま支援はできない。表現しないとだめなんです。

援助、援護、教授の3つの仕事は一般的には一人じゃできない。今回も、この後、きょうとNPOセンターの話で、そこで連携があって、何人もの当事者のファースト・ジョブが成立しています。「ひきこもり」は、「医学モデル」という言葉にあらわされるような、精神科医がマンツーマンで部屋に呼んで1週間にいっぺんカウンセリングしてどうなるものでもない。仕事の選択肢を、精神科医の人が持ってきてくれればいいですけど、「この子はアルペルガーも入っていて」、とか、そういうを聞いたってしょうがない。精神科医がそういう判断をしてもいいけど、次に「こういう仕事があるから、こ

これをお願いしたらどうだ」とつないでくれないとだめですよ（もちろんそういう精神科医もいますけど）。

そういう意味で援助、援護、教授と3つあるけど、グループの中で援助の前提をつくり、援護もNPOとか仕事を開発するとか、これらは全部、「言葉」でやる。3つともやっていくことが「ひきこもり」における対人援助作業には必要なんだけど、必ずしもグループだけでは完結しない。いろいろと他のところと連携をする。そのためには共通言語を持つ必要がある。

今回、上田さんのFSJGの報告では、ずいぶんグラフが出てきました。世間には、ひきこもりの支援という名目で、いろんなグループがあって、“お上”からもお金もらってやっているところもあるんだけど、何人面倒みたうち何人が社会に出た、といった統計資料みたいなものはあるかも知れないけど（それ自身もあまり見ないですけど）、どういう経過で、どうやったらうまくいったのか、援助者の試みと成果の関係についての表現はほとんどできていない。ロジックがないんですね。それじゃ、ちょっと、何か製品を売っている民間企業だったら、そういうところにお金出させませんよね。「こういうことをしたらこうなった。なるほど理にかなっている、だから伸びたんだ」と人に伝えていないで、単に「居場所」を開いた、そこに何人か来た、就職できましたというだけではね、はっきり言って対人援助としてどうかと。「経過についてのエビデンス」を出さないといけない。なぜかという「科学的であれ」という意味ではなく、皆で協力してやらないといけない。今までは熱意で「お願いします」と頭を下げていろんなところへ行っただけで、そうではなく「なるほど、こういうやり方で手塩にかけて育てきた、なら、うちも頑張ろう」とい連携先の人の勇気が湧いてくる。そういうことをうまく表現することを考えていかなければならない。

グラフで出すというと、対人援助領域の人はいやがる人もいます。グラフを出す意味というのは、それは見やすいからです。何も数値化しないといけない、というのではない。別に数値化したから科学じゃない。人に伝えられる言葉になっているかどうかなんです。今までの対人援助の世界はあまり人に伝えなくても「俺は名人芸で治してやる」で済んでいたわけ。そんなとこ

ろで済むといわれる内容は、抜本的な解決に至らないんです。皆で連携して、援助と援護と教授をうまく回すことを協力しないといけない。他職種の人とか、今まで交流のなかったところをお願いにいく時に、本人が、何ができるか、どういう状況ならこれができるかという、一種、「パスポート」というか得意技を書いたものを持たせてやりたい。そういう意味で共通言語を持たないといけない。

「助ける」ということなんですけど、親御さんなら親としてのモチベーションはもちろん高いですね。お金もらって対人援助している人は商売ですからやります。ただ、実は学問的に探究していくと、わけもなく人を助けるというのは人間、動物もやらないんですね。基本的には自分の利益に戻ってくることしか行動しないんですよ。よく考えてみると。もちろん我々はルールとして人を助けないといけないと思っているけど、理念だけで支えていくものは疲れると折れちゃう。そのために、福祉施設なんかでは若い人がなかなか定着しないということがあるんですね。それはなかなか厳しい状況、問題もあって、ということもあるんだけど、どうしても、知らないうちにも、めげることがあるんです、「助ける」ということは。ですから、それは絶えずチェックしていかないと。

上田さんの発表にもあったように、3カ月ごとに切ったというのは、その意味ですごいことです。ダーッとやっていって「後で振り返ればいいや」ではなく、3カ月期限を切るというのは、たえず自らの実践を振り返るわけです。「これでよかったんだ（あるいはまずかった）」と絶えずチェックする。普通なかなか自分のことはチェックしないんです、人のことはチェックするけど。親の会がやっていると、うっかりするとだらだらいつっちゃうこともある。それなりに親御さん同士励ましあうことになるから「親の会」というのも、うっかりするとそうなる。愚痴のいいあいでもっちゃう。しかしFSJGはそうじゃないやり方をしたわけですね。当事者のためにちゃんとうまくいっているか、それを絶えずチェックする。これは本当に重要なところですよ。

次に本当に当事者が望んでいることなのか、それを確認する方法はあるか。これは助ける（＝対人援助）という行為で重要なポイントで、具体的方法と

しては、選択肢に「否定の選択肢」があることが重要になります（Nozaki and Mochizuki, 1995参照）。「悪いけど、別の、してくれないか」というのがあるんです。対人援助の作業では、よかれと思って相手にすることは結構あります、プロであっても。よかれと思ってすることが、どこが悪いと思うかも知れません。しかし、よかれと思ってやったことは、つい押しつけちゃう。「この子はこれが好きなのよ。私はこの子が何か好きだか知っているわよ」というのがプロの証のように思ってしまう場合があるんですけど、対人援助学からいうとプロの証とは「こうやって聞けば今、彼は何がほしいかを表明できる」、その方法を知っているのがプロなんです。「私はこの子が好きだか、知っているよ」は援助者の間尺（ましゃく）の中でしか当事者は伸びません（＝QOLが拡大しません）。こういう対人援助は、相手に「裏切られる（予想外の行動をとる）」ような事態を知らないうちに回避しようとする。「やっぱり、この子は、これが好きなのよ、あれをとるよ」と。当たるとうれしいです。当たったら、それみろと、うれしくなるんだけど、ほんとうは、「あんなもんが好きだったのか、聞いてみないと、わかんねえもんだな」というのをちゃんと聞き出せるのが対人援助援助のプロなんです。

今まで福祉の人も教育の人も、自己決定について考える時に、うっかりすると「何よ、聞いてみなくたって普段からつきあっていくからわかるよ」みたいな話になるんです。でもそれは怪しいんです。支援者が勝手に決めつけている場合がある。

支援者の「思い」を抑えて、本人の話を聞こうとするのは、なかなか力のいることではあります。これは力技（ちからわざ）です。実は、押しつけるほうが簡単です。そういう関係の中であれば、確かに相手が従ってくれるようになりますよ。長い施設生活の中で、施設利用者に「あなた、ハッピー？」と聞くと、ほとんど「ハッピー」と言うように、簡単に（しかも知らず知らずのうちに）行動形成ができてしまう。そうさせないように、そうならないように、異議を唱えてもらうことが大事なんです。異議を唱えて暴れたりするのではなく「私はちょっと今では困るんだけど」ということを、すっきり表明しやすくする工夫が必要です。今回の発表では、あまりそこが強調され

ませんでしたけど、上田さんが言うように、「否定してもいいんだよ」ということは大切なことです。一般的にも、二つ出されたら、ついどちらかとおっしゃいますよ。それは相手を従わせる時の実はテクニックなんです。「これをやってください」と言うのと「嫌です」と言えるんだけど「どちらとる？」と言われると、つい片方をとっちゃう。自己決定のようにみえて、それは「騙し」のテクニックなんです。ちゃんと二つ以外のものを「両方嫌だ」というのを、どれだけ相手に保障させるかで本当に自分が「やりたい」ことを反映させる。このことも、「ひきこもり」をしている人の最初の一步の敷居を低くするための、プロのヒューマンサービス、対人援助には当然の技法です。

「できる」の表現

「できる」という表現の内容です（図6参照）。IQや発達年齢ではないんです。個人の属性や状態ではないし、トータルな「人格的成長」とかいうのではない。

将来の社会生活に必要な行動を指すのか？

今、上田さんが考えていること、あるいは「対人援助学」で考えていることは、そうではない。

それは、当事者、個別の個人にとって「今、やりたい」行動が成立しているか、ということです。これは、「単独」でやる必要はない。「援助付き」でやればいい。「援助付き」というのは、障害のある人とか「ひきこもり」だから特別にそうなんだということではなく、誰でも皆、援助付きで動いているわけです。今日もみなさん、誰かに子どもを預けたりとかいろんな状況

「できる」表現の内容

- 通信簿の点数？ IQ？
 発達年齢？ （個人属性や状態）
 - “トータルな” 人格的成長？
 - 将来の社会生活に必要な行動？
- 当事者（個別の個人）にとって、「今」やりたい行動が成立しているか

図6 「できる」の表現

でいらしてるんだと思います。皆、一人で生きているわけではない。ところが、ちょっと人と違う行動パターンを持っている人が援助を受ける、つまり、知的障害の人が援助を受ける、あるいは車椅子の人かスロープがいるとかいう話が出ると、特別にその人に厚く援助しているようですが、そんなの我々がいろんな人に援助を受けている総量よりずっと少ないんです。それと同じように一般的だということを前提に考える。

対人援助学とファーストステップ・ジョブグループ

「学」の特徴として

- ・「当事者が「やりたい」行動の選択肢を拡大する（できる）」プロセスを表現する
- ・当事者の「個人属性の記述」ではなく、「これがあれば『できる』という条件についての公共的な表現を追及する
「根性」「やる気」：すでに公共的表現ではない
「発達」や「能力」といった一般的な個人属性と同じである。「人は発達するために生まれてきたのではない」

図7 対人援助学とFSJG

対人援助学の特徴をファーストステップ・ジョブグループの方針にあてはめて考えてみます。

まず一般目標として、「やりたい行動の選択肢を拡大する」ということが挙げられます。やりたいことが増えていくことが人生なんです。ここが一番大事な価値としておいているわけです。これは能力が拡大することではない。

そして、本人が「やりたい」と思うことがどれだけ、どのようにして増えていくか。そのプロセスを表現する。これがあれば「できる」という条件について公共的な表現を追求する。「彼は計算ができます」ということではな

く「こういう条件のもとだったら彼はできる」ということを表現する。

今までの、「障害」のある個人に対する表現は、うっかりすると「何ができない、これができない」という言い方ばかりになります。そこでは現在の目標は常に「引き算」で表現されることになります。親なり社会が求めているものを列挙して「今、できる」ものから引いた残りが、「できないんだ」というのが、とすると、こういう人たち（「障害」のある人）の表現だった。

そうではなく、積んでいくわけです。「これがあればできる」ことをずっと記録して増やしていこうと。根性とかやる気とか、「ひきこもっている人は根性がないんだ」とか。そんなことを言っただけで何の解決にもなりません。それは公共的表現でもないんです。「こいつはやる気がないです」と言っても何もならない。「やる気があるんです」と伝えてもだめなんですよ。「こういう場面ならこういうことかできます」と次につなげていかないといけない。

「できる」は発見するものではなく創造していくもの

「できる」は発見されるものか（図8参照）。本人がポテンシャルを持っているから、そのうち出てくるだろう。そういう考え方、「待つ」という考えもある。待つというの、ほっといて放任というのと混同される。同様に、「受容」という表現も、力のない実践者が何もしないで当事者を追従してい

「できる」は発見されるもの？

- ・ある条件があれば「できる」を発見する

「ある条件」（これが対人援助の内容となる）には
個別の個人や状況で、無限に近い方法がある。

つまり「できる」は創造していくことである。

図8 「できる」は発見される？

くだけのこともある。「ひきこもり」の支援についても、見聞することがありますが、何もしていないのを受容と称していることが、ままあります。そういうところでは、受容でないと何になるか。「強制」になる。受容しないというのは支援者がどんどんその子をトレーニングしたり、やらないと叱る、という方向にいきなり飛んじゃう。

受容か強制か、そういう二分法ではないわけです。こちらが選択肢を準備する、その中で当事者が「自発的」に動く。もちろん選択肢の作り方や選べ方次第で強要することも、すでにお話ししたように作ろうと思えば作れる。そうならないように、第三の選択も求められるようなものを準備していくことが必要です。

この「できる」行動を作っていくには、個別の個人の状況で、無限に近い方法があります。そこでは、「できる」ものをたんに発見しているんじゃないんですね。創っていく、皆で。

FSJGの話でもありましたが、お風呂を洗うのに500円、いまイチ高い。相場からして。しかしここでは、まず当事者に魅力的なことを創造する必用がある。ですから、500円が問題なのではない。ある人は200円でも動く。同時に「値づけ」とは、周囲の人にその仕事の価値を認めてもらうために出てくるんだと思いますが、最初は、なにもその仕事を世間一般の相場に合わせてやるのではない。ここにいるメンバーが次にできそうなことがあるんじゃないか。皆の知恵を寄せ合って「よしこれを仕事にしちゃおう」という話です。クリエイティブな話なんです。仕事を創っている、「できる」を創っているという積極的な話なんです。

本人のポテンシャルを発見するとか、探っていくということではなく、本人と周囲との共同作業なんです。FSJGでは、そういう内容を、積極的に参加してつくっているところが重要です。「待ってる」んじゃない。今を認めるというのは「受容」ではない。ちゃんと親が、グループで支えられるという、自分の行動を支える仕組みをつくりながら、その「できる」を創造していく、ということが重要だと思います。

「できる」を“点”で評価しない

「できる」を点で評価しない（図8）。学校教育に関しても良く言われるのですが、「できる」を評価するとき、ある「時点」での点数（「数」が特に問題ではなく、どんな記述でも同じ）を評価するのではなく、大事なのは推移、経過です。どういうふうに、どのようにして、ここまで、行動の選択肢が増えていったか、その「推移」こそ重要だということです。こういう状態があれば、グラフに傾きが（上昇が）出るが、こうなると停滞する、という具合に経過を辿る。そして、「できる」というのは単独の行為ではなく相互作用です。社会の関係の中でできあがっていくわけですから「できる」というのは、実は周りを支える側も、どこかも変わってくれているわけです。FSJGでいえば、仕事を提供してくれるのも、その一つ。そうした機会を契機にお母さんの支え方もどんどんうまくなっていく。ある個人の能力をピンで止めたような形で「これかできます、あれができます」ということではなく、それに至るまで「どういうことをしたらできるようになるか」を考えていく。このことが重要です。

「キャリア・アップ」という表現

最近、われわれは、「キャリア・アップ」という言葉を使います。特別支援教育とか就労場面で、この言葉を使うことは好きじゃない人もいると思いますが、なにか脅迫的に上昇志向を追求するようにに思われるかも知れませんが、ここでアップするものは「行動の選択肢の拡大」です。本人が選ぶものが増えていくことかキャリア・アップです。そして、さらに当事者が選択肢を拡大について提案する。ここが重要なんですね。選択肢を、今まで用意してもらった選択肢をやるのではなく、次の段階は自分で自分の環境を変えて選択肢を増やしていったり、自分の行動（仕事）が確認できるようになればいい。これが、キャリア・アップという、選択肢が増えていく量的な変化だけではなく、自分でそのことが言える（表現できる）ようになっていく。自

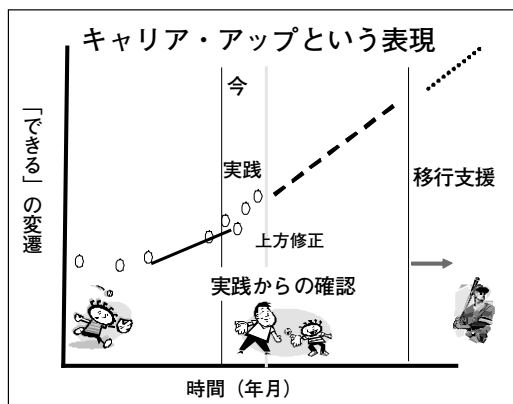


図10 キャリアアップという表現

分で確認できるようになったらもう、今度は自分で転がしていくことができるようになる。仕事をしながら次の仕事に出会い始めていく。これは素晴らしいことです。今までの厚い援助付きだったものが、いよいよ援助の仕方を自分が自分で援助できる方向に持っていく。このことは大事なこ

とで、これは大学生も現状ではロクにできない感じがありますね。そして、そういう指向をもつ教育を今までしていなかったような気がする。「障害」のある個人のキャリア・アップの話をする時、じゃあそれを支援する学生自身のキャリア・アップはどうか。学校の先生や、他ならぬわれわれ教員のキャリア・アップはどうかと反省しちゃったりする。ただべんべんとやっているのではなく、どうやったらうまくいくかを確認していく。

FSJGの実践においては、自分でそういうことが表現できる。そういう領域に達した人が出ていますよね。そういう意味では、すごいと思います。

対人援助学的チェックリスト

最後に、「対人援助学」の観点からの実践に、これだけのことがほしいという要素をファーストステップ・ジョブグループについてあてはめてみます。まず、教える・治すという立場ではなく「助ける」立場になっているかどうか。次に、援助、援護、教授という内容があるか？ ただ教えこんで卒業させようとか、やりっ放しで選択肢だけ出しているのではないか。第三に、「できる」を創造しているか？ つまり「できる」を待っているだけでなく、創っているか、それが積極的に出ているか。第四に、表現することをしてい

るか。表現し、それゆえ連携ができてくるか？

最後に、プロセスとキャリア・アップをとらえているか。本人がキャリア・アップを自分で自分の表現をし始めることができてきているか。この5つが実現していれば、対人援助学的には及第点です。

FSJGの対人援助学的チェックリスト

- (1) 教える・治すではなく「助ける」か？
- (2) 援助・援護・教授という内容があるか
- (3) 「できる」を創造しているか？
- (4) 表現し、連携をしているか？
- (5) プロセスとキャリア・アップを捉えているか？

図11 対人援助学的チェック

FSJGは、上田さん自身が、「連携と融合」と言われる大学院を卒業し、人間科学研究所に客員研究員として実践を続けています。我々教員が、その内容を指導したのではなく、本当に当事者と上田さんが、いろんな先生を回って、連携と融合を自ら創ってしまったわけです。言ってみれば、我々はそれを追っ掛けて、「対人援助学」の可能性を確認させてもらっているようなものです。

司会：ありがとうございました。

引用文献

望月 昭（1989）. 福祉実践の方法論としての行動分析学—社会福祉と心理学の新しい関係—. 社会福祉学, 30(2), 64-84.

望月 昭（編著）（2007）. 「対人援助の心理学」朝倉書房.

望月 昭・中村 正・サトウ タツヤ（編著）. 2009. 晃洋書房.